

### 位置と環境

本遺跡は福山町北部の佳例川比曾木野字城ヶ尾に所在し、国分平野へ流れ込む前田川が形成した北側の狭小な段丘の先端部に立地している。わずか70m幅の段丘先端部は標高差12m（海拔385m～373m）の急傾斜の地勢である。その間は、テラス状に形成された3段の狭小な平坦面が生活舞台として利用され、遺構・遺物が密集している。

### 調査の経緯

調査は、東九州自動車道（国分IC～末吉財部IC）の建設に伴い、日本道路公団の委託を受け県教育委員会が発掘調査を行った。平成9年度（1997年）には、確認調査、平成11年度～12年度（1999年・2000年）に本調査（9,100m<sup>2</sup>）を実施した。

### 遺構と遺物

本遺跡の層位は、シラスまで18枚で、その間に旧石器時代、縄文時代早期・前期・中期・晩期、古墳時代の複合遺跡で、遺構・遺物を伴う遺物包含層が存在した。なお、その間に噴出起源や噴出年代の明かな火山噴出物堆積が確認され、遺跡解明に大いに貢献した。

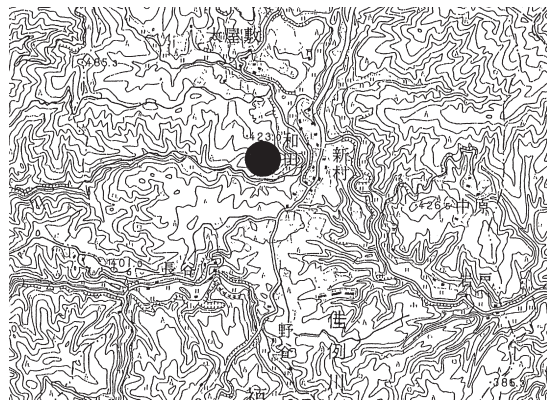
各層毎の遺構・遺物は以下の通りである。3層は、古墳時代の成川式土器の包含層で、竪穴住居跡4軒を検出した。

4層はabの層に分かれ、4a層が縄文時代晩期の入佐式土器が出土し、土坑4基を検出した。4b層は、約4,200年前の霧島関係の御池軽石である。

5a層は、縄文時代中期や前期の春日式土器・深浦式土器・曾畑式土器・轟式土器などの包含層で、土壙5基、集石3基を検出する。5b層は、約6,500年前の鬼界カルデラの噴出物のアカホヤ火山灰である。

6a層は、縄文時代早期の塞ノ神B式土器の包含層で、集石14基を検出した。6b層は、約7,400年前のP11と呼ばれる桜島噴出物である。

7・8層は、縄文時代早期の包含層で、7層は塞ノ神B式土器、塞ノ神A式土器、平椀式土器、手向山式土器、下剝峯式土器、押型文土器などの後葉の



第1図 城ヶ尾遺跡の位置

包含層で、集石28基、土壙19基、土器埋設遺構4基などを検出した。8層は、早期前葉から前葉の包含層で、押型文土器、円筒形土器、石坂式土器、吉田式土器、前平式土器などが出土した。

9層は、P14で約11,500年前の薩摩火山灰である。

10～15層は、旧石器時代の文化層で、13層下部から14層上部に桜島噴出物のP15が、14層下部には桜島噴出物P17が確認された。

この旧石器の包含層は、古い15・14が第I文化層、13層が第II文化層、12層が第III文化層、11層が第IV文化層、10層が第V文化層と呼称した。

10層は石鏃や細石器が出土し、11層では細石器、ナイフ形石器、楔形石器等が出土し、礫群6基を検出した。12層ではナイフ形石器が出土し、礫群4基や土坑1基を検出した。13層では、礫群18基を検出し、ナイフ形石器、国府型ナイフ形石器、台形石器、三稜尖頭器などが出土し、礫群18基を検出した。

15層では切出形ナイフ形石器、台形様石器などが出土し、礫群3基を検出している。

18層は、約25,000年前のシラスである。

遺構や遺物の概要は、古墳時代に竪穴住居跡が調査区の東側に1軒、西側に3軒と200m程の距離を置いて発見されている。特に、西側の住居群は調査区域の外に展開する可能性を示している。方形を基調とする住居形態で、住居内の一角に炉跡状の掘り込み遺構を備えている。急傾斜地の狭い平坦地に住居群が残され、生産基盤の脆弱性が感じられるが出土遺物に特異性は認められない。

縄文時代晩期では、編布や網目を圧痕した土器片もあり、織物技術の一端が垣間見える。中期の春日式土器は1個体分、前期で砲弾形の深浦式土器は3

～4個体、曾畑式土器と轟式土器は少数の破片で確認できる。短期間であるが、何らかの形で生活が開いたことが理解される。

縄文早期では、塞ノ神B式土器、塞ノ神A式土器、平椀式土器、手向山式土器、下剝峯式土器、押型文土器、円筒形土器、石坂式土器、吉田式土器、前平式土器などが出土した。これらの土器はそれぞれ分布を異に出土していることから、土器型式毎に固有の選地利用を行ったことが読みとれる。

中でも塞ノ神式土器は圧巻で、塞ノ神B式土器は環状ブロックを形成し、塞ノ神A式土器は土器埋設遺構と大型土坑に伴って発見されている。

塞ノ神B式土器の環状ブロックは、遺物と礫の密集する環状部と分布の希薄な中央部からなり、環状部はさらに7か所の集中域で構成される。これらの集中域は廃棄エリアと推測され、多量の遺物と礫が出土している。なお、それぞれの集中域の内側には集石遺構が残されることから、大量の礫は集石遺構で使用した礫を廃棄した残骸と判断した。このことから、遺跡を形成した人々の活動域が環状ブロック（廃棄場）の内側で展開し、活動域の外に計画的に廃棄場を備えた生活風景が浮かび上がってくる。また、7か所の集中域は土器の廃棄状況から、西から順次東方向に形成された可能性が指摘されている。

塞ノ神A式土器は、土器埋設土坑や大型土坑等の掘り込み遺構と密接に関わり合っていることが読みとれる。埋設土坑には、深鉢形土器1点と壺形土器3点がそれぞれ埋められていた。特に、壺形土器の見事なプロポーション、製作技術の高さや流れるような独自の施文、仕上げの緻密さ、まさに驚異的である。これらの鉢や壺は煮沸具として使用した後に埋設されたことは明らかで、胴部に付着した多量のススや胴部下半から底部に残る器面の赤化や剥落、微細な亀裂等が物語っている。こうした精巧な鉢や壺は、煮沸具としての本来の機能を果たした後、埋められることで新たな機能と役割を担ったのであろう。一方、大型土坑からは赤色の3点の耳栓状土製品、石鏃や抉入石器が出土し、焼土跡も2か所残されていたが柱状の施設が無いことから、墓墳的要素が強く感じられる。

旧石器時代については、層位的出土を基に5時期

に区分し、古い方から順に第I～第V文化層と呼称している。豊富な石器から各文化層を概観すると、第I文化層は不定型な横広剥片を素材とした、切出形ナイフ形石器と台形様石器で構成される。第II文化層の石器組成は充実し、不定形な剥片剥離技術に縦長剥片の生産も加わり、大小のナイフ形石器が造り出されている。注目される一つが、小型ナイフ形石器が安定して存在することと国府型ナイフ形石器の存在であり、次が、三稜尖頭器の爆発的な増加である。第III文化層の特色は、ナイフ形石器の小型化と三稜尖頭器が減少する傾向が見られることである。次の第IV文化層では、ナイフ形石器の小型化がさらに進行し、三稜尖頭器はその製作技術も衰退の傾向が見られる。また、位牌塔型細石核で構成する細石器も1ブロック確認されている。第V文化層は、本県に広く分布する野岳・休場型細石核の細石器の文化層で、細石刃文化期の変遷を検討できる内容を秘めている。

#### 特徴

噴出起源の明らかなテフラが安定した堆積を示し、その間に数多くの遺構や遺物が残され、層位的観察を容易にした。中でも重複する5枚の旧石器時代の存在は、石器群の変遷を具体的に観察できることに加え、鹿児島湾奥部から大隅半島を解明する際の指標となる。

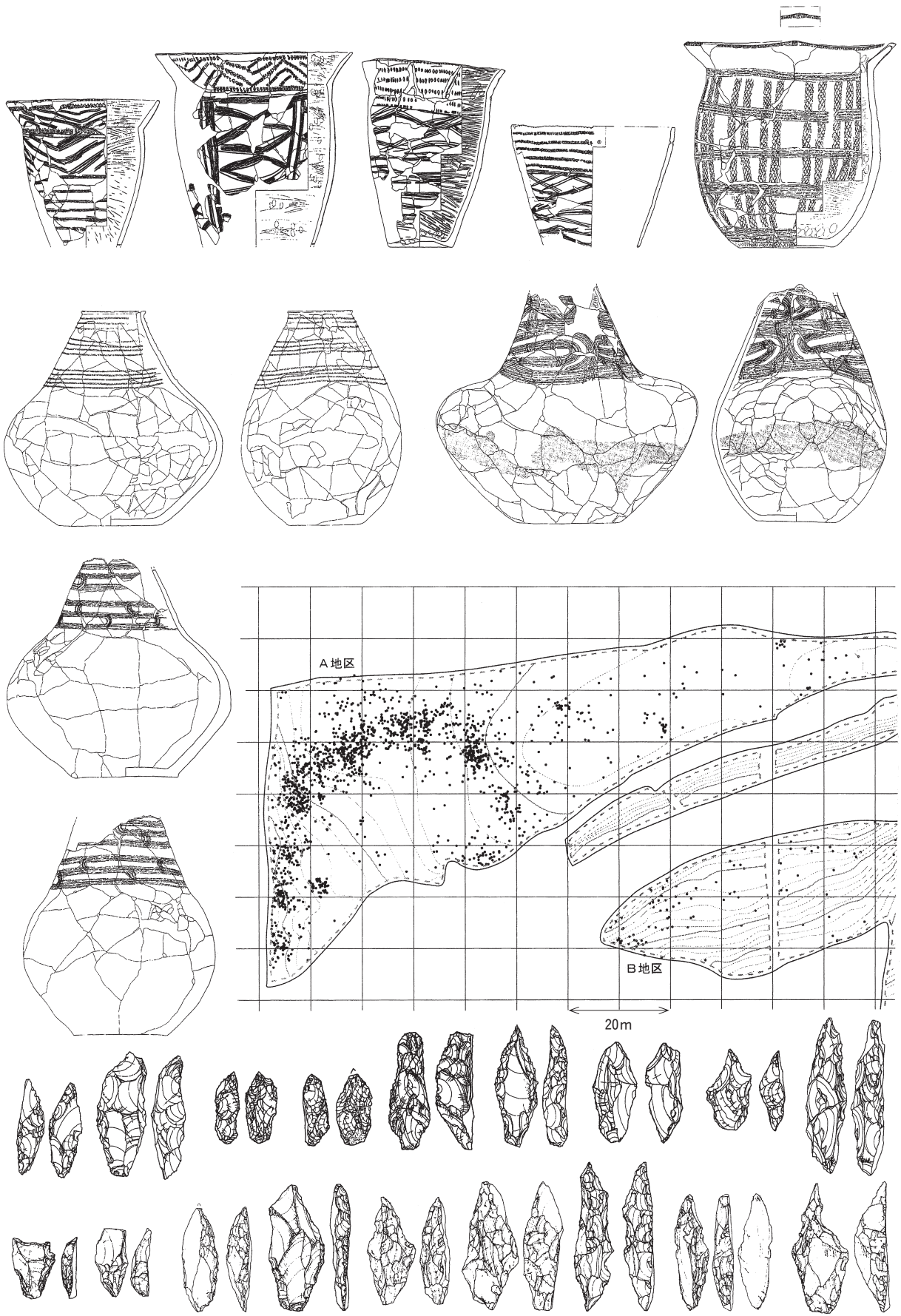
塞ノ神B式土器で構成された環状ブロックは、廃棄パターンの新たな一類型（城ヶ尾型）を提供し、彼らの計画的土地利用の在り方を示したと言える。次に、塞ノ神A式土器を埋設した背景にある彼らの思想・世界観は強い興味が引かれ、その解明も急務となる。また、塞ノ神A式土器と塞ノ神B式土器での分布域が異なること、出土層に格差が認められることは、両者の先後関係を追求する上で欠かせない遺跡である。

#### 資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

#### 参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003「城ヶ尾遺跡II」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』60 (長野眞一)



(土器のスケールは任意)

第2図 グリッド配置図及び出土遺物